創立150周年を迎える伝統ある総合病院

NCGM PRESS

国立研究開発法人
国立国際医療研究センター病院
医療連携ニュース

National Center for
Global Health and Medicine Press
Vol.3
June

新任のご挨拶

NCGM 副院長
玉木 毅

平成30年4月より副院長（診療、医療連携、保険等担当）を拝命致しました玉木毅と申します。元々当院にて皮膚科診療科長を務めさせていただいており、連携医の先生方には大変お世話になっておりました。また長く社保支払基金の審査委員や外保連の皮膚科委員も務めさせていただいており、様々な医療制度の変遷の経緯などについては、比較的身近で目の当たりにしてまいりました。この度副院長という重責を担うこととなり、もとより浅学非才の身ではございますが、責務の全うに全力を傾注する所存ですので、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

医療をとりまく環境は年々厳しさを増しており、当院としても「生き残り」をかけて、諸問題の解決に取り組んでいるところでございます。大西真院長の指揮のもと、外科系診療体制の強化、ダ・ヴィンチ手術の拡大、就労支援等の生活サポートも含む幅広いがん診療体制、ゲノム医療・個別医療（プレシジョンメディシン）推進、24時間切れ目のない救急医療体制、HIV/AIDSや肝炎さらには国際感染症や薬剤耐性への取り組みを含む幅広い感染症対応、糖尿病をはじめとした生活習慣病への取り組み、各種先進医療、チームによる認知症・精神疾患ケア、各国語通訳に対応した外国人診療、リニューアルオープンした人間ドック等々、他のナショナルセンターにはない「総合医療」を基盤とした高度急性期医療を提供する医療機関として、今後もさらに高いレベルを目指して、一同努力を続けてまいります。

私が副院長として管轄する分野は、外来・入院・医療連携・がん・認知症・薬剤・栄養・褥瘡・保険・臨床検査・輸血・放射線と多岐に亘りますが、とりわけ医療連携は当院が目指す医療を実現する上で不可欠の、最重要分野と考えております。2018年2月京王プラザホテルにて、NCGM医療連携の会を開催させていただき、たくさんの連携医の先生方にも御出席賜り、誠に有難うございました。「顔の見える連携」の重要性をあらためて認識させていただいた次第で、今後も定期的に開かせていただく予定でおります。逆に当院からも各区医師会などが主催される行事等に是非参加させていただき、関係を深めさせていただきたいと思いますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

連携を支援する体制も、各診療科予約枠に「地域連携」枠を設け、連携医の先生方からの紹介患者様を極力お待たせせず、スムーズにお受けするように致しましたことをはじめ、今後は「地域医療支援センター」を立ち上げ、よりきめ細かく連携医の先生方のニーズに合致するようなシステムに整えてまいりますので、御要望・御提案等（もちろん御苦言も）ございましたら、随時お知らせいただければ幸いに存じます。

繰り返しになりますが、医療をとりまく環境が今後ますます厳しくなる中、今後の日本の医療はどうあるべきかを連携医の先生方とともに考えさせていただき、当院の当院ならではのミッションとは何か、そしてそれをいかに果たしていくかを模索してまいります。今後とも何卒御支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

この1年の絵画

前衛芸術家
草間彌生

© YAYOI KUSAMA

みんなは平和を求めている 2013

Yayoi Kusama

幼少より水玉と網目を用いた幻想的な絵画を制作。1957年単身渡米、独創的な作品と活動はアート界に衝撃を与え前衛芸術家としての地位を築く。1973年に帰国後も全世界を飛び回り活躍中。美術作品の制作発表を続けながら小説、詩集も多数発表。2016年に文化勲章授賞。2017年より、ワシントンDCのハーシュホーン美術館彫刻庭園を皮切りに、北米ツアーが巡回中。

新任のご挨拶

眼科診療科長
永原 幸

この度、眼科診療科長として着任しました永原幸です。眼科診療に従事して29年目になりますが、これまで主に東京大学医学部附属病院で研鑽を積んで、小児（未熟児）から高齢者まで難症例の手術治療に携わってきました。ここ3年間は東海大学医学部付属八王子病院に勤務し、地域医療への貢献、研修医の指導、また、緑内障関連（細胞外マトリックス）の研究プロジェクト進めておりましたが、本年度から活動拠点を当院に変えて業務を継続することになりました。

眼科を受診する患者さんの多くは高齢者です。小児で治療対象となるのは先天性の疾患が多く、成人は加齢に伴い進行する疾患がほとんどです。中途失明に至る疾患の30％を占める糖尿病と緑内障は予防対策が重要で、糖尿病網膜症、眼圧上昇に伴う視神経萎縮や視野障害など病状に応じて適切な治療を行う必要があります。何れも経過観察が長期になるため、当科では地域の先生方との連携を密にして、円滑な病診連携を推進しています。

高齢者の視機能低下は社会活動に大きく影響しており、眼科は高齢者の視機能回復に大きく貢献しています。ここ10年の眼科診療は医療技術の進歩によって、診断技術の向上だけでなく、薬物、手術治療の適応時期の判断や治療効果の判定がより正確に行えるようになりました。また、手術治療も低侵襲化によってより早期の社会復帰ができ、術後成績も飛躍的に向上しています。例えば、白内障、緑内障手術は短期入院または日帰り手術、網膜硝子体手術（黄斑前膜、黄斑円孔、網膜剥離、糖尿病網膜症など）は、病状や経過によりますが1週間程度の入院で治療を行っています。小児の手術件数は成人に比べると少ないですが、学業に影響のないように治療の日程を決めていて、なるべく短期入院にして家族の負担を軽減できるように配慮しています。また、難しい症例の治療にも取り組んでおり、　遠方からご紹介いただく患者さんもおられます。

実際の臨床の現場は高齢者の増加に伴い、眼科を受診する患者数は増加の一途をたどり、外来の待ち時間が長くなる傾向にあります。繁忙化する日常臨床の中においても、患者さんの視機能回復に努めることは言うまでもありませんが、最新の医療技術を取り入れ、最善の治療が提供できるよう努める所存ですので、今後とも皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

NCGM 歴史探訪 ❷

明治維新

晩年の松本順。当時は40代の壮年であった。

戊辰戦争の終結後、政府は急速に行政組織を整えていきます。1871年に設置された〝軍医寮〟もその一つです。病院の運営だけでなく、軍医の採用、教育なども行う機関です。

各藩に所属していた医師のうちから軍医を志望する者が集められました。そして、西洋医学の問題を課して試験を行い、その階級を定めました。これは、我が国初の医師試験です。当時、西洋医学を修めた医師が少なかったことから、困難を極めました。

軍医たちは、毎日の勤務を通じて、臨床技術や衛生学を習得しました。また、基礎医学および臨床技術に関する試験を受けるなど最新医学を学びました。

「普通医は直に軍医となる事を得ず、軍医は何時でも直ちに普通医となる事を得る」

当時の幹部の考えから、軍医たちは一般の医師以上の教育を施されました。そうした教育を受けた軍医たちは、当時の一般医学水準に比べて高度な知識・技術を持っていました。各地の駐屯地に派遣され、軍人のみならず、地域住民にも診療を行いました。1899年に現役軍医の開業が禁止されるまで、軍医たちは地域医療の一翼を担っていたのです。

〝軍医寮〟の責任者には、松本順が就きました。「当時比肩スベキ者ナシ」といわれ、西洋医学の第一人者でした。NCGMの創立者といえ、後に陸軍本病院の病院長に任命されます。

【参考文献】陸軍軍医団（1913）『陸軍衛生制度史』、石黒忠悳（1936）『懐旧九十年』、陸軍軍医学校（1936）『陸軍軍醫學校50年史』、小川鼎三・酒井シヅ（1980）『松本順自伝・長与専斎自伝』、佐久間温巳（1983）「一般人を対象とした現役軍医の病院」『日本医史学雑誌』29（2）P.182～184、黒澤嘉幸（1997）「明治の軍医部出仕官について」『日本医史学雑誌』43（3）P.298～299

乳腺腫瘍内科
診療科長
清水千佳子

今年の4月から本格的にNCGMの一員となりました清水千佳子と申します。乳癌の薬物療法を専門にしており、乳腺センターで、周術期、進行再発乳癌患者さんの診療にあたっています。どうぞよろしくお願いいたします。

私が乳癌治療を学びたいという志を持ち、国立がん研究センター中央病院の門を叩いたのは、約20年前のことです。築地での研修時代は、まさに乳癌薬物療法の発展期であり、幸運にも、新規抗がん剤の開発やプレシジョン・メディスンの先駆けとなるマイクロアレイを活用したバイオマーカー研究など、固形癌の開発研究の最先端を体感することできました。

いっぽう、実臨床では、若い世代の患者さんや、薬物療法抵抗性となった患者さんとの対話の中で、果たして、自分たちは患者さんの納得のいく医療を提供できているのか、いつも疑問を感じてきました。乳癌治療では新規抗がん剤の開発・導入が進んでいますが、残念ながら新規抗がん剤の治療効果は限定的で、少なからぬ副作用を伴います。またバイオマーカーによる治療個別化についても、実地臨床レベルでのブレークスルーがない状況です。がん患者のQOLを維持するには、診療科を超えた連携が必要となるだけでなく、医療従事者が患者目線で、患者さんと治療の「value(価値)」を率直に語り合う姿勢が求められていることを痛感しています。

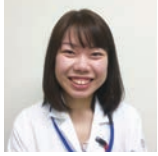
2003年に短期留学したM. D. Anderson Cancer Centerでは、「患者中心の医療」を共通認識として、立場の異なる専門職が前向きにコミュケーションする「チーム医療」の文化が、米国随一のがん治療施設の高度な診療と研究を支えていることに感銘を受けました。昨年10月よりここNCGMで働かせていただきながら、NCGMは、総合病院ならではの質の高い包括的ながん医療を実現できる、またとない場であると感じています。未病の方から終末期まで、多様な身体的・心理的・社会的背景を持つ患者さんがいらっしゃるNCGMですが、がん以外の診療部門、診療支援部門が充実したNCGMの恵まれた環境を最大限に生かして、また、NCGMがはぐくまれてきた地域との連携を大事にしながら、がん専門病院では取り組みにくい臨床的な課題に、皆様と一緒に取り組んでまいりたいと考えております。

皆様の温かいご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

今月の旬菜

そら豆

Season of this month



管理栄養士
大橋恵理

そら豆の旬は地域によって異なりますが、関東は5〜6月頃と言われており、そら豆はたんぱく質や糖質、鉄、ビタミンB1、B2を豊富に含んでいます。ビタミンB1は、糖質をエネルギーに変える働きや疲労回復、脳や神経の働きを正常に保つ役割があります。ビタミンB2はエネルギー代謝を助ける働きがあり、特に脂質の代謝には不可欠となります。また、皮膚や口腔粘膜の機能を維持する働きもあり、肌荒れ等に対して良い効果も期待できます。

今回は皮を使用しておりませんが、皮には食物繊維が含まれており、血糖値の上昇をおだやかにしたり、コレステロールの吸収を妨げ体外に排出する作用もあるため、皮ごと焼いて食べるのもおすすめです。

海老・そら豆・人参のだしバター炒め

● 1人分のエネルギー 175kcal、塩分 1.3g

材料（2人分）

海老…100g個　そら豆…80g
人参…50g
スナップエンドウ…50g
顆粒だし…8g　水…50ml
酒…大さじ1　バター…10g
サラダ油…適量

作り方

1. そら豆はさやから取り出し、薄皮も剥いておく。スナップエンドウは食べやすい大きさに切る（½等分程度）。海老は殻を剥いて背わたをとる。人参は半月切りにする。
2. 顆粒だし、水、酒を混ぜ合わせる。
3. サラダ油をフライパンで熱し、1を炒め、全体に火が通ったら2を入れ、馴染んだらバターを入れて出来上がり。

Nursing Information

看護通信

「看護フェア」を開催しました

5月12日はフローレンス・ナイチンゲールの誕生日です。国際看護師協会ではこの日を「国際看護師の日」と定めています。　当院でも、毎年この日をはさむ1週間を「看護週間」としています。
今年は5月9日～15日に地下1階アトリウムで「看護の心をみんなの心に」と題して、日常の看護の場面を撮影した写真や各病棟の紹介を掲示しました。
「看護フェア」イベントとしては、健康相談や血糖測定、手洗いコーナー、ハンドマッサージ体験ブースを開きました。5月14日には認定看護師による認知症と糖尿病についての市民公開講座を開催しました。イベントには、たくさんの方に足を運んでいただきました。わずかな時間ではありましたが、ほんの少し看護の心に触れていただけたのではないかと思います。
これからも看護師一同、あたたかい看護の心が届くよう努めてまいります。

医師人事異動（2018年）

採用・転入等

発令日	役職名	氏名
4月1日	第一眼科医長	永原 幸
	乳腺腫瘍内科医長	清水千佳子
	臨床ゲノム科医長	荒川玲子
	救急科	廣瀬恵佳
	救急科	松田 航
	乳腺外科	中山可南子
	脳神経外科	玉井雄大
	産科	諸宇ヒブン
	整形外科	川畑謙介
	国際感染症センター	木下典子
	下部消化管外科	出口勝也
	下部消化管外科	永井雄三
	下部消化管外科	大谷研介
	神経内科	安田 勉
	麻酔科	渡邊美由樹
	心臓血管外科	田村智紀
	形成外科	十九浦玲子

退職・転出等

発令日	役職名	氏名
3月31日	副院長（婦人科医長）	矢野 哲
4月1日	第一呼吸器内科医長	杉山温人
3月31日	乳腺外科医長	安田秀光
	臨床研究連携室医長	福田尚司
	神経内科	肥田あゆみ
	麻酔科	竹内菊子
	形成外科	今村三希子
	腎臓内科	勝木 俊
	泌尿器科	手島太郎
	臨床病理室	額賀明子
	総合診療科	國松淳和
	下部消化管外科	秀野泰隆
	麻酔科	森野良蔵
	放射線診断科	亀井俊佑
	心臓血管外科	藤岡俊一郎

診療時間・アクセス

外来診療時間　8：30～17：15

初診受付　紹介状が無い場合　8：30～11：00
紹介状が有る場合　8：30～14：00

ただし、形成外科、産婦人科、神経内科、整形外科、精神科、リハビリテーション科の6科および結核（疑いも含む）については「11時までの受付」となっています。

休診日　土・日・祝日・年末年始

アクセス　都営地下鉄大江戸線　若松河田駅より徒歩5分
東京メトロ東西線　早稲田駅2番出口より徒歩15分
JR大久保駅　又は　新大久保駅より都営バス新橋行、
JR新宿駅西口より都営バス医療センター経由女子医大行
「国立国際医療研究センター前」下車

HP　http://www.ncgm.go.jp/

国立研究開発法人
国立国際医療研究センター病院
NCGM
Center Hospital of the National Center for Global Health and Medicine

発行：国立国際医療研究センター病院　〒162-8655　東京都新宿区戸山1-21-1　代表／TEL：03-3202-7181　FAX：03-3207-1038　地域医療連携室　直通／TEL：03-3202-8066　FAX：03-3202-1003